

緋弾のエリア～Barbaric 'em～

トライグルー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京武偵校そこには一流の武偵となるため日々励む生徒達がいる、しかし中には例外もしくは不真面目な生徒もいるだろう。これはそんな不真面目で野蛮それでもやるときはやるやつらが織り成す物語。

駄文、不定期、キャラのこれじゃない感があります。それらが苦手な方はブラウザバックをお勧めします。

目次

人物紹介	1
親方空から野郎と女の子が!?	4
今日は厄日だよ!	10
ツインテハリー	16
羽牙と尋耶という男	23
武偵殺しへの逆恨み	30
アリアの秘密と戦妹	36
おこなのか尋耶くん	43
Over kill (序)	48
Over kill (破)	54
Over kill (急)	60

人物紹介

【名前】 はがけいすけ 羽牙慶介

【携帯武器】 オートマグ3・???

【身長】 180cm

【髪色】 黒

【ランク】 強襲科A (R)

今作におけるオリ主1。見た目は一見薄目で大人しそうな顔をしている青年だが、いざ銃撃戦になると表情が変わりまるで楽しんでいるかのような振る舞いをする。例えるならドリフターズの島津豊久。

ちなみに本人はつまらない事が嫌いなのか娯楽を阻害する存在を嫌悪している。

尋耶とは小さい頃からの腐れ縁で武偵校中等部のころからパートナーを組んできた相棒とも言える間柄である。

ランクは強襲科のAランクであるが、

本来ならばそのランク・実力共にSランクでありSランクになれる武偵が限られていなければキンジと同じSランクだっただろう。そういうこともありランクの後ろに (R) 意味は 予備 Reserve という補欠扱いになっている。

更に羽牙は中等部にいたころにガンスミスの資格を取得しておりそれでも整備科に入らないことから整備科泣かせと呼ばれている。

羽牙の武器はその性格のせいとその時々で使う銃が変わるのでオートマグはむしろ一番使いなれているだけである。

羽牙姉

Overkill (急) にて明かされた羽牙の家族の一人。未だ尋耶と同じく越せない壁の一つでもある。そして羽牙達がいた武偵校 (恐らく武偵中) では Wild sisters と呼ばれておりランクはS相当だろう。

【名前】 かぐやねいしんや 風音尋耶

【携帯武器】 ???・PSG-1・レミントンM700

【身長】 178 cm

【髪色】 黒に薄い茶色が混ざっている

【ランク】 狙撃科Sランク

今作におけるオリ主2。見た目はつり目の無愛想な顔をしている。例えるならグリザイアの風見雄二。

それ故か周りからは無口で話しかけにくい雰囲気を出しているがそれはただ尋耶がまわりの人間には興味がなく、羽牙やレキ達の前では普通に表情を変えている。

羽牙の人物紹介にもあった通り羽牙とは中等部からの仲で彼を良き親友であり理解者だと捉えている。

だが尋耶は快樂主義者を気取っており興味を持った相手もしくは重要人物程度なら普通に覚えているのだが興味のない人物などは存在自体を忘れるほどどうでもいいとおもっている。

だからこそなのか仲間や身内、戦妹にはかなりのお人好しであり自由履修で強襲科を取っている関係で戦妹に火野ライカをもつ。

武偵校では狙撃科のSランクだがその理由の一つがキリンクレンジにありレキをも越える2500mだと言われ、他の生徒からは嘘だと噂されているが真実は本人しか知り得ないという。

余談だが同じ狙撃科のレキとは恋人関係にあり馴れ初めなどを調べようと諜報科の生徒が全力で調べたところ尋耶にフルボッコされたことから生徒達の間では暗黙の領海になっているという。

Overkill (急) にて明かされたが羽牙と同じく姉がいるらしく尋耶でもいまだ越せない壁らしい。そして羽牙とは家が御隣さん同士と言うこともあり小学校からの親友ということも明かされた。

【名前】 白音夕紀しろおとゆき

【携帯武器】 M1911ロングスライド

【身長】 165 cm

【髪色】 白

【ランク】 探偵科B

今作のオリキャラで中等部のころから男性用の制服を身につけ肩より少し延びた白髪を後ろでまとめている。

そして一人称はボクと言葉使いが男の子寄りなのだがれつきとした女であり本人は男と間違えられる事に馴れたのかあまり気にしていない。

羽牙たちとはとある武偵校の中等部のときに出会いそこから彼らのパーティに入り活動をしている。

中等部のころ救護科にいたことがあるらしく、かの武偵殺しがバスジャックをした際負傷者の手当てを担当するなど器用なところもある。(ちなみにランクはC)

【名前】 藤咲志麻ふじさきしま

【携帯武器】 ???

【身長】 162cm

【髪色】 黒

【ランク】 整備科B

本作品における羽牙の戦妹であるが弱気な所があり言葉使いが所々不安定なことがある。

だが羽牙や尋耶の事は尊敬しているのか同い年との会話のときに二人の話題がでると熱くなるときがあるらしい。

違法改造フィアット500

とあるル〇ン三世シリーズでお馴染みのフィアット500しかし主人公らは車輛科にまかせエンジンを変えるだけに留まらず窓ガラス及び外枠を防弾仕様にかえ瞬時に爆発的な速度を出すために後部ハッチ内にはスーパーチャージャー、さらに後部座席のシートの下にはシモノフPTRS1941(対戦車ライフル)を解体して仕込んでおり即座に組み立てて使用できるようにしてあり、それ故か本来のフィアット500よりも一回り大きくなっているのである。

親方空から野郎と女の子が!?

武偵、凶悪化する犯罪に対抗するために新設された国家資格であり語源は『武装探偵』の略である。

さらに武偵免許を持つ者は武装を許可され、逮捕権を有するなど警察に準ずる活動が可能になる。しかしあくまで武偵は『武装した探偵』であり金で動き、金さえ貰えれば武偵法の許す限りどんな仕事でも請け負う「何でも屋」のような面もある。

とある早朝ソレは起きた、彼こと遠山キンジとその友人である青年、はがけいすけ羽牙慶介は普通に通学するつもりだった。

あんなことが起こるまでは…

「ヨオ！キンジ今朝ぶりだな！なにやら忙しそうだk：『減速すると爆発しやがr（バキョー！）』うるせえ！黙れロボセグ！てめえの声は十秒前に聞き飽きてんだよ大人しく自動セグウェイになってろ！」

「おい！羽牙これ以上変な風にするなよ!?!もしこの状況が悪化したらおれはお前のを恨むからな！」

とセグウェイのメガホンをもぎ取りつつ余裕を見せる羽牙とそうでもないキンジは普通の登校などできるはずもなく、キンジは爆弾付きの自転車に乗りながら武装した十機の無人のセグウェイに羽牙と追いかけられている。

しかしさらに細かく言うのなら横に追従しているセグウェイに羽牙が乗り爆弾付きの自転車をキンジが爆発しないよう必死になりながら乗っているという奇妙な絵面になっているのだった。

「いやあくそれにしてもお前、朝自転車に乗りながら『ホームルームに間に合えよ』とか言つときながらこんな事に巻き込まれるとはお前も災難だよなくしかもよりにもよって追いかける者は武装した無人

セグウェイとききた！もし俺がコマ○ドー大佐ならお前は何て言うかな？w」

「今日は厄日だわ！ってか!?むしろ悠長なこと言ってないで助けるとかそういう考えはないのかよ!?全く！こんなことなら悠長にメールチェックせず白雪とちゃんとバスに乗ってればよかったよ！」

というツツコミをキンジからもらいながらも羽牙は携帯をとりだし操作し始める。そして数少ないアドレスから目的の人物の名前を探し当てながら返事をする。

「まあ、あせんなよキンジ、昨日テレビで見たんだが『過ぎ去った不幸を嘆くのは、すぐにまた新しい不幸を招くもとだ』ってあの有名なシェイクスピアが言ってたらしいぞ！それに一応あいつに連絡するから待ってるどうせ早朝練習終わって屋上で二度寝してるかもしれないねえしな…おつ、あつた」

そして目的のアドレスを見つけたのかその人物に連絡を取った。

???
s i d e

そして場所は変わりここは東京武偵校の屋上さらに言う貯水タンクの上、そこには長いガンケースを枕にグースカと寝息をたてている青年の姿があり彼が持つ携帯からは友人からの遅めのモーニングコールもといヘルプの電話が届いた。

「あゝい？こちら尋^{じんや}耶ですが二度寝中で出られません。ですので他をあたりやがr《オメエ起きてんじやねえかてかお前の留守電メッセーヂちがうだろ!?》チツ…なんだ羽牙かどうした？まさかお前昨日、自分の車を車^{クルマ}輻^じ科に預けてきて『明日はどうせ始業式バックレるしバスか歩きで行くわ』とか余裕抜かしてたけど寝坊でもしたのか？」

《おい今然り気無く舌打ちしたよな聞こえたぞ? 「助かりたくないのか?」まあ、あれだよ状況が状況だからとりあえずこっちを見てよ? もう少して武偵校につくから! 方角的に多分レインボーブリッジ側だ》

そんな羽牙のヒドイ手のひら返しに不機嫌になりながらも携帯をインカムに切り替え起き上がり、尋耶は自分の枕にしていたガンケースから一丁の銃、レミントンM700をとりだしスコープを覗き込む。するとそこには冒頭の奇妙な絵面が写し出され尋耶は顔をしかめた。

「なあ…羽牙? 確かにお前らが武装した無人セグウェイに追いかけてるのとは多分解る 《嘘つけわかってねえだろ》うるさい。と言うかなんで一台にお前が乗って俺に電話をかけてきてるんだ?」

《そんなの決まってるだろ? 後ろのやつらを狙撃してほしいんだよ! 実はキンジの自転車に爆弾仕掛けられててこっちはそれどころ「じやあせめて爆弾をどうにかしてやれよ」無☆理☆だ☆爆弾解除なんて高度な技術あるわけないだろ? それにもし失敗して野郎と心中なんてごめんだね!》

そんな会話をし「はあ…」とため息を吐く尋耶。しかし彼が再びスコープを覗こうとした瞬間屋上の扉がものすごい勢いで開かれた。

「今度はなんだよ騒がしい…っておいおい! ちよと待て!」

尋耶は何事かと貯水タンクの上から下の様子を見る。するとピンク色が特長のツインテールをした少女があわてて下の様子を確認し柵に足をかける、しかしその少女は尋耶の存在に気付いてないらしくそれは彼からしてみれば今から飛び降り自殺しますと言っているものだった。

《ん？どうした尋耶もうあと少いで学校前だぞ？なんかあったのか？》

「羽牙、予定変更だ援護できなくなった！《w h a t!?!オメエどういことだよ！狙撃科のお前のならちよちよいのちよいだろ!?!》当たり前だろ！テメエらのなんか工夫すれば助かっちゃいます的な命より目の前のちよつと考え直せばまだ未来はありますの命の方が重いんだよ！」

『なに言っちゃってくれますか？尋耶くん!?!我々に君はD e a d E n d!しろと？おいおいマジで野郎と心中はごめんだぞ！そもそもその口ぶりから助けてくれようとしてたんだよね？そうだよね!?!だったら助けろ（ブチッ、ツーッ）』

しかし羽牙の必死の説得も空しく尋耶はライフルをかなぐり捨てその少女の元へ駆け出した。

「おい！そのツインテのガキ考え直せ！確かにピンクのツインテなんてちよつと痛々s∴珍しいけど自殺することはないだろ？だからそこから降りろって!∴∴ツ!?!畜生が!」

しかし走りながらに発したその言葉は届かず少女はなにかを叫びながら柵を飛び越え空中へとその身を投げ出し尋耶は柵にのり上から引きずり下ろそうと少女の腰に手を回したまま一緒に空中へ放り出され…

「ちよつとアンタなにしてるのよ！危ないじゃない!」

「自殺志願者が言えた口かバカタレ！お陰で俺は人生最後の地面との熱いキスで終わりだよ!」

「ああもうわかったわよ!しっかりと掴まってなさい!」

という言葉が聞こえたがそんなことは彼の耳には届かず尋耶は先

ほど友人のヘルプを蹴ってなければと後悔しながら己の最後を待つのであった。

羽牙 side

そして時は少し前にもどる。

「だったら助けt (ブチツ、ツーツー) ……はあ……畜生が」

「おい！どうしたんだ羽牙！尋耶のやつには連絡はとれたんだろ!? なんだよそのため息は」

「頼みの綱が…切れた。俺らで何とかするしかねえ…」

「なん…だと!」

羽牙が電話をしまい顔をしかめながら状況を簡易的に述べその瞬間キンジの顔が絶望に染まる、しかしふと羽牙がなにかを思い付いたのか口を開く。

「よし！すまねえキンジ俺の未来のためそして生きるために盛大に^{爆発}芸術してくれ大丈夫お前のことはメモ帳に書いて間違えて一緒に洗濯しない限り忘れない！」ニッコリ

「…嘘だろおお！つかお前メモ帳持ち歩いてないだろ!？」

そんなキンジの叫び声は空へと消え二人にとつての(片方にはあの世へのだが)ゴールである正門が近づき校庭に入りかけたとき空から大声が聞こえ二人はそちらへと視線を向ける。その先にはパラシユートを開きこちらへと滑空するピンクのツインテ少女、そしてその腰にしがみつく尋耶^{己の相棒}の姿であり。

「親方！空から（クソ）野郎と女の子が！ってアイツら突っ込んできてね？」

「おれは親方じゃねえ！って・・・え？」

そんなノリ突っ込みの最中、尋耶は空中でなぜか手を離し体を捻りながら羽牙へと突っ込み木の陰へと吹き飛ばしツイント少女はそのアシデントのせいかそのままキンジを爆弾付き自転車から救出しその勢いで体育館倉庫へとなだれ込んだ。

今日は厄日だよ！

この日羽牙は自分の運の悪さを嘆いた。それもそうだろうなにせ
二年生の新学期が何事もなく平和に始まると思いきや友人に事件に
自ら首を突っ込み
巻き込まれ、挙げ句パートナーに助けを求めれば断られる。

しかしそんなことは羽牙にとってはどうでもよかった。なぜなら
自分が助けを求めたパートナーから先ほど見事な三回転スクリユー
を織り混ぜたキックを空中から降りてくる際に食らい、木の影へと
吹き飛ばされた
隠れたはいが四機の無人セグウェイから銃撃を食らっているから
である。

「さアて！状況を整理しようか。尋耶さんよオ！こっちはキミにヘル
プを蹴られた上に空中からのスーパークックで腹がとてつもなく痛
てえ！さらに言うなら絶賛セグウェイの銃撃祭と来た！きて、俺は予
知能力なんて持ってないが俺の隠れている木かお前が隠れている木
が削れて蜂の巣にされる未来がみえるぞ？なんでこうなったのかわ
かるかい！尋耶くん！」

「そうだな、大抵のことはわからんが相手は四機のこっちは二人で不
利なことはわかる。さらに言うなら相手は動きを感知して撃つてき
てるのか…羽牙。武器はあるか？」

「お前なアに冷静に分析してんだ!?!てか自分の得物はどこにやったん
だよ!?!」

「ウルセエな！あのツインテのガキのせいで全部屋上だよ！寝返りう
つときホルスターの銃が邪魔でライフルケースの横に置いといたら
この様だ！まったく今日は厄日だよ！つか早く銃投げて寄越せ！ど
うせ二丁や三丁位持つてんだろ!?!」

そんな言い争いをしながらも羽牙は自分の脇のホルスターや鞆の
なかを探るとお目当てのものを見つけたのかソレをリロードし
「ほらよー」と隣の木に隠れている尋耶に投げ渡した。

「ロングスライドのガバメント、ハードボラーかなかなか乙なものを持ってんなコレアイツのдаро?修理おわってんだらうな?」

そして尋耶は後ろのセグウェイに視線を向け羽牙も自分のホルスターから己の得物であるオートマグ3引き抜き構える。

「俺はな尋耶。ちゃんと安全に動作するってわかるまで依頼主には返さない主義なんだ。まあ、文句があんなら返せ?お前が使わなくても俺があとでやつとくからよツ!!」

「まさか!信用してるよそもそも装備科泣かせの羽牙って言われてるやつがそんなハマやらかすなんて言語道断だとおもうぜ!!」

そこから二人は一斉に飛び出し銃口をセグウェイ向けるしかしそこには先ほどの言い争いなど既になく二人のその顔はただ単にこの銃撃戦を楽しむような顔になっていた。

???
side

正直な所武偵殺しとよばれている彼女は焦っていた。そもそも当初の計画では早朝、無人セグウェイを餌にオルメスこと神崎アリアと遠山キンジ接触させ彼の本当の実力を見せることでキンジとパートナーを組ませる算段だったのだ。しかしそこに現れたイレギュラー羽牙と尋耶が全てをぶち壊した。

まず早朝に羽牙は緊張感を出すために向かわせた一台のセグウェイに飛び乗りあろうことかメガホンとUZIをもぎ取り呑気にツーリングを楽しむ始末。そして自分の中のシナリオにそって向かわせようとしていた十台のセグウェイもあわてて向かわせるが既に遅くもう一人の厄介者こと尋耶がアリアと一緒に合流し足止めのためにそちらに四台を割く羽目になってしまったのだった。

(クソツ!またお前らかよ!前回のシージャックといい今回といい私の邪魔をしてそんなに楽しいのか!?)

そして舌打ちをしながらも内心そんなことを思いながら彼女はマ

シンに取り付けられているカメラの画面を切り替え羽牙たちに回している四台の画面を開くするとそのシーンは丁度準備を終えたのか二人が木の影から二手に飛び出し銃を構える所だった。

三人称 side

木の影から飛び出してからの彼らの行動はとても過激なものだったなげならまず羽牙は自分の銃であるオートマグ3を撃ちつつも先ほどもぎ取ったUZIを乱射し自分に向いている二台のマシンを容赦なく破壊する。そして尋耶はあろうことか自分を追いかけてきたマシンの間接部さらに取り付けてあるUZIの銃口に一マガジン分正確に叩き込み行動不能にしたのだった。

「ふいふ、一時はどうなるかと思っただが結構あつかなかつたな尋耶?」

「まあ、武偵殺しといえど本業は爆弾関係なんだろう?ほら去年のシージャックの時みたいにさ。つか羽牙!今さらだが予備のマガジン渡し忘れたる弾切れになったらどうすんだコレそれともさっきの逆恨みか?」

「そう言いジト目になりながらも弾切れのガバメントのスライドを戻しキノセイダヨーと知らんぷりをしている羽牙に渡す。一方羽牙はガバメントを受け取りつつも自分が乱射したUZIに違和感を感じたのかガチャガチャと銃を分解し始めパーツを地面に落とし始めた。」

「見てみるよこのUZIひでえなんでもんじゃねえ使い古されてるのかフレームはガタガタそれこそセミオートで使わない限り精密な射撃は無理だぜこりゃあ」

「じゃあ犯人は相当な金欠かバカだな、そんなんで武偵様を殺ろうなんざ良くてアサルトのCランクか…」

ふと尋耶は体育館倉庫の方に視線を移すと「ああ、なるほどな」とつぶやくそして頭の上に？マークを浮かべつつも羽牙もその方向みだ。そこには二丁のガバメントをふりまわすツインテの少女からバックステップをしながらどこから出したのか一つのマガジンの弾をまくキンジがいた。

「おい、羽牙ウチのお隣さんはロリコンだったか？あれは完全にスイッチ入っちゃまってるキンジだぜ？」

「しるかよ、それに仮にも理子とかになら反応しそうだがありやどう見てもインターン生だぞ？さすがのキンジでもありえないだろ」

「でもどう見たってヒスってるぞあれ…」

「…よし教室いこうぜ！」

そうして羽牙は目の前の現状を見なかったことにして教室へと歩き出し尋耶はため息を吐きつつもその後ろについていくのだった。

尋耶 side

「じんくんにはつくんおっはよー！」

羽牙と尋耶は教室に入ると奥の方から手をふる生徒がこちらへと駆け寄ってくるそして二人はその人物が理子だとわかると片手をヒラヒラとさせて軽く挨拶した。

「ほいほいおはようさん朝から元気いいなお前は」

「言ってやるなな羽牙それしか取り柄のないゴスロリっ子なんだから」

「わーお！じんくんは相変わらずの毒舌っぷりだね！むしろ理子にだけ冷たくない？あ！もしかして新手的ツンデレイダダダダ!? つぶれる！じんくん冗談だからやめて理子の頭から出しちゃいけない音がしてるから！」

そして羽牙はそれだけを言うとしてそくさと自分の席につき理子はなにか余計な事を言おうとしたがそのまま尋耶のアイアンクローにつかまるのだった。

「相変わらずの上手い演技だな理子？それにロクにちからこめてないんだからそこまで痛がる必要ないだろ」ニツコリ

「痛いものは痛いんだよじんくん!？」

「はいはいどうせ過剰反応だろ？むしろ羽牙なら無視しながら話し続けるぞ?。」

「やっぱお前らおかしいよ」

「ん？なんかいったか?」

「いやいやなにも言っていないよ！それよりもさつき校庭のほうで爆発音があったんだけどじんくんたち結構遅く登校してきたから名にか知らないかなくって理子思ってるんだけどさーいや、むしろじんくんたちがあの爆発を起こした犯人だったりして?。」

「まあ…そうだな…あれだ全部キンジと羽牙が悪い…うん、そういうことだ」

「そ、そうなんだく…」

遠い目をして朝の事を思い出す尋耶はなぜか疲れた顔つきで理子に説明した。

羽牙 side

「おはようダイ。朝忘れ物したって寮に戻ったきり始業式になっても姿がなかったけどなにかあったのかい?。」

羽牙は理子と尋耶のやり取りを無視し席に着くするとそこに肩まである白い頭髪を後ろで束ねた小柄な青年が声をかけてくる。

「よお、白音おはようさん。まあ俺たち武偵によくあるトラブルと鉢合わせちまっただけだよ。それよりほらお前のガバメントだ」

羽牙は鞆の中からハードボラーを渡すと白音と言われた青年はその銃を受け取りながら羽牙に原因を聞いた。

「ありがとうケイ！ところで原因はなんだったの？」

「お前の言った少し右に反れる感じがしたって聞いたからな、少しバラして確認したらバレルが歪んだせいだった。まあその他パーツも少し傷んでたからもろもろ交換しちまったけどよ」

「え、いいのかな？ボクは予算はケイが言ったバレル分しか予算を渡してないはずだけど」

受け取ったガバメントのスライドを動かしたり空撃ちをしたりしながら白音は羽牙に聞いたが羽牙は大丈夫だと言って朝のホームルームまでの暇を潰すのであった。

ツインテハリー

???
side

「ん。尋耶さん?.....いない.....」

早朝、4月の暖かい日差しがさす東京武偵校の屋上そこに一人佇む生徒がおり眠そうな目を擦りながら辺りをキョロキョロと見渡す。

しかしそこにお目当ての人物は居らずふと校庭校庭の方を見るとそこには呆れながらも羽牙と一緒に校舎へと入って行く尋耶が見えその様子はここへと戻ってくる気配はなかったのかその生徒は自分と尋耶の荷物を持ち屋上をあとにした。

三人称side

「なにか忘れているような気がするんだよな」

「どうした尋耶?」

「いや、なんと言うか心の中ではとても大変なことを忘れていたような気がするんだが頭のなかではそうでもない気もするって言った方がいいのか?」

「ごめんワケわからんわ」

尋耶がホームルームが始まる前に首をかしげながらに言ったことに羽牙は反応する。すると教室の後ろの扉が開き一人の生徒が入ってくるだがその生徒の荷物は大きいライフルケース二つに拳銃の入ったホルスター一つそして二つのカバンを持ちながら羽牙たちの元へと近づいてきておりその人物を見た尋耶は顔を青くするのだった。

「おはようございます羽牙さん、白音さん・・・風音さんかぎね今日もいい朝ですね」

「あれ、今尋耶のこと名字で呼ばなかったか?いつもは白音みたいに下の名前で・・・」

「いいえ羽牙さん、そんなことはありません風音さんの事は何時も名

字で呼んでいますから。あと風音さんあなたの銃とカバンです屋上に忘れていましたよ」

スツとレキと呼ばれた青い髪が特徴の生徒は尋耶にカバンとライフルケースを渡すと自分の席である尋耶の隣へと座り会話に参加する。しかし羽牙はコレは修羅場だと認識し尋耶は冷や汗をかき涙目である。

「おい、尋耶レキめちやくちや怒ってんじゃねえか？お前何した？」

「……実は早朝練習終わって屋上でレキと二度寝してたんだが……お前らに巻き込まれてそのまま置いてきちった♪」

「尋耶さん私は怒っているので冗談でも素直に謝った方が身のためです」

「本当にすみませんでした！」

そうして尋耶がレキをおいてきてしまった理由をテヘペロしながら話すがレキは容赦なくドラグノフを突き付け尋耶はあわてて土下座するタイミングでチャイムが鳴るのであった。

「皆さんおはようございます。それでは朝のホームルームを始めていきますね」

チャイムが鳴りクラスの担任である高天原ゆとりがクラスへと入って来るそして順調に教務科からの連絡などを終わらせていくなかふとこんなことを言い出した。

「みなさーん実はこのクラスに転校生がきますそれでは神崎さーん入ってきてくださーい！」

クラスの生徒たちが入り口の方へと視線を移すそこにはピンク色のツインテールが特徴小柄な生徒入ってきており担任は黒板へ名前を書き込んでいく。だが羽牙と特に尋耶はその少女を見るなり顔をしかめた。

「(おい、尋耶！あれ今朝のガキじゃねえか!?)」

「（見りやわかる！そもそもキンジの野郎はどこ行きやがった!? 厄ネタはアイツの担当だろ!）」

「先生私あいつのとなりがいい」

「っ!?」

今朝の事を思いだし小声でアリアの話をする二人だかふと自分達の方へと指を指され肩が跳ねる。しかしその指が指したさきにいたのはキンジだった。

「なんだ、キンジの隣のかよ焦らせやがって…ビビって損したぜ…」

「羽牙、あのな現実逃避はよくないぞ？あのガキ…神崎とか言うやつ
の席お前の前だ」

「ンナこたあわかってンだよ！てか尋耶席変われ!」

「諦める現実是非常なんだ…」

「俺が諦めることを諦めろオ!?!」

その瞬間尋耶達が口喧嘩をしてる前方で数発の銃声が鳴り響いた。「恋愛なんて下らない!次そういうこと言うやつは風穴開けr」なに教室で銃をぶっぱなしてんじゃアホオあ!?!」

だがアリアが大声で天井に向けてガバメントを放とうとしたときゴスツツという人の頭からなっではいけない音と共にアリアの頭に尋耶のチョップが炸裂し痛みのみあまり気絶したのだった。

尋耶 side

「おい、尋耶今日の飯当番お前とレキだったよな？俺はちよいと頼まれ事片付けるために部屋にいるから食するとき呼んでくれ」

「へいへい、仰せのままに。レキ悪いが手伝ってくれないか?」

「わかりました。今夜は何を?」

「まあ、無難にラーメンとチャーハンかなレキの好きな豚骨味もあるぞ?」

「っ!!全力でお手伝いします」

「あはは…レキは相変わらずだね。じゃあボクはシャワー浴びてくるねちよつと今日は任務で走り回って汗だくだったんだ」

場所は所かわって男性寮。1日が終わり寮に戻った羽牙達はそれぞれ部屋着に着替えるなど自分のやることに着手した。ちなみに何

故男性寮にレキが居るのかという疑問なのだが一年生の頃から尋耶とレキのこの関係が何時の間にやら続いており、周りからは公認のカップルとして認識されているのだが本人達は学校などではその雰囲気を出さないようにしているのだった。

ピンポーン

「ん？こんな時間にインターホンが鳴るのも珍しいがもしかしてキンジか？すまないがレキちよつと出てきてくれるか？」

「わかりました」

尋耶がチャージャーハンを炒めてる途中インターホンが鳴り響くそして羽牙と白音が出れないことを知っている尋耶はレキに対応をたのみ作業にもどるのであった。

レキ side

「よお、レキ。尋耶たちいるか？」

「キンジさんこんばんは。尋耶さんは夕飯の準備中ですがご相伴に預かりに来たのですか？」

「い、いやそうじゃなくてだな？なんと言えればいいのか…」

レキが玄関に行き扉を開けると尋耶の言ったとおりお隣さんでもあるキンジがいた。

「あれ、レキじゃないこことって男性寮よね？なんでいるのかしら」

するとキンジの陰からひよこつと部屋の中を覗くアリアがおりレキはその理由を説明するのであった。

「私は尋耶さん達とパーティーを組んでいますし羽牙さんに銃メンテの勉強を習っているのですついでに同居させてもらっています」

「ふーん、まあいいわ、ハガとジンヤってやつは居るのよね？だったら少しお邪魔するわよ」

そう言いアリアはレキの返答を聞かずリビングの方へと入っていく。そしてレキは「キンジさんもうぞ」と伝えるとキンジも「すまないな」と言いながら部屋に入っていくのだった。

「お邪魔するわよ？ってアンタ!?あの時の暴力男!」

「なんだキンジじゃなくてちんちくりんのツインテハリーか。こんなとこまで押し掛けて何のようだ?つかキンジ!ガールフレンドの手綱はちゃんと握れよ元々はお前のネタだろ?」

部屋に入るとアリアは台所で料理をする尋耶を見つけ指を指しながら今朝の事を思い出す。しかし尋耶はアリアを無視し入ってきたキンジにビシツと中華お玉を向けながらに言うがアリア自身も気絶させられた身としては叫ばずにはいられなかった。

「なに無視してんのよ!アタシはね!アンタに殴られて気絶するはめになったのよ!」

「殴ってねえチョップだ。はあ:本当にコイツは何がしたいんだ、もしかして新手の嫌がらせか?」

「悪い尋耶。実は神崎がどうしてもお前らに話があるみたいでな。やめとけとは言ったんだけど:それより気になったんだがツインテハリーってなんだ?」

「ん?ああ。ダーティーハリー症候群・別名ワイアット・アープ症候群とも言うが朝コイツは恋愛になんて興味がないと銃を乱射したろ?それこそ新人警官が自分を逞しく見せようと過度な暴力を振るうのと同じことだからって訳でな、わかるか?」

「あー:だから神崎の特徴をとってツインテハリーか:何となくわかる気がするよ:てゆうかお前らにも当てはまらないかそれ?」

「気にするなよ、解りきったことだろ?それより飯食ってくか?」

「いいのか?材料とか人数分しかないんだろ?」

「余分に買ってきてるから大丈夫だよそれより神崎とか言うヤツどこに行っただ?」

中華鍋を軽々振るいながらチャーハンを炒める尋耶と話していたキンジはふとアリアがいないことに気づきキョロキョロと周りを見

る。すると尋耶の手伝いの合間にアリアの行動を見ていたレキが事情を説明した。

「アリアさんなら先ほど私に羽牙さんの部屋の場所を聞いてきたのでそこへ行つたと思います。尋耶さん達が会話をしている最中無視されたと怒って廊下へ出ていったので」

「なるほどな、というかレキどんな風に場所を教えた？」

「お風呂場の向かい側と答えましたがなにか問題ありましたか？」

「いや、なら大丈夫だレキなにせ神崎のやつ長期戦とか言ってお泊まりセットまで持ってきてきてるんだ。それに勝手に俺の部屋に上がり込むなり間取りを確認してたから間違えないだろ？」

だが尋耶は「ふむ…」と考え込みキンジに聞いた。

「なあ、キンジお前の部屋に入ったときに間取りを確認してたんだよな」

「ああ、それがどうかしたか？」

「実はあまり認知されてないんだけどな男性寮ってのは二部屋ごとにトイレとか寝室とかの配置が左右逆になってるんだよお前も経験あるだろ？」

「あー、確かに白雪の目を欺こうとここに1日泊まったとき羽牙のいる部屋に入っちゃったことあつたっけな」

「だから神崎がもし羽牙のいる部屋に行こうとしたら…あとはわかるな？」

「いやわからねえよ精々間違えて入っちゃまうくらいだろ？」

「いいやシャワーを浴びている白音と鉢合わせてして一騒ぎするぞありゃ」

「それはいろんな意味であり得ないだろ」

「まあ様子を見てればわかるさ。それよりもレキ仕上げにあれ作るから他の作業頼むわ！」

そうして尋耶はキンジと会話をしながらもテキパキと人数分の料理を用意するのだった。

アリアside

「全く！キンジまで私を無視するなんてドレイとして失格よ！」

アリアは自分を無視して会話をするキンジと尋耶に腹をたてレキから聞いた部屋へと足を運ぶ。

「えっと…確かキンジの部屋は玄関から入って左がお風呂だったから右の部屋ね…って脱衣場？まさか間違えた？」

そして確認しながらも羽牙の部屋であろう扉を開けるがそこは脱衣場であり再度自分の先ほどの記憶と照らし合わせるが。

ガチャリ

「あっ」

「ふえ？」

尋耶の予想通りお風呂場の扉が開き白音とアリアが鉢合わせするのだった。

羽牙と尋耶という男

アリア side

「あつ」

「ふえ？」

そんなそっけない声を互いに出し数秒間の沈黙が続くその理由は尋耶の予想通りと言えがいいのかアリアは部屋を間違え羽牙のいる部屋へとたどり着かず向かい側のシャワーを浴びている白音のいる部屋へとはいつてしまったからである。

「つああああ!?」と、ごごめんなさい!ち、違うのよ覗きとかそんなんじゃないくてあ、アタシは部屋を間違えただけで!」

「う、うん。えつと…ごういうときは…とりあえず落ち着こう?」

「これが落ち着いていられるわけないでしょ!?それになにアンタ落ち着いてんのよ!そもそもはやく下を隠すとか…あれ?」

そしてとある理由でその沈黙は破られアリアは思わず目を両手で覆いながらも白音に下を隠すように訴えるしかし興味本意なのか指の間から白音の体を見るとある違和感に気づいた。それは下にあるものがなく上には背中まで伸びている白髪が隠している小ぶりな胸があるからである。

「お、女なの?アンタ」

「確かにボクは服装や口調が男の子よりだけどれつきとした女であつて男ではないよ?」

そもそもアリアが脱衣場で驚いた理由はシャワーの音を聴き偶然見た洗濯かごの中に入っている男性用の制服を見た瞬間に白音が出てきてしまい、もう一つは白音の顔を見たアリアは昼間少しでも羽牙達の情報を手に入れようと探偵科の学生棟前で偶然居合わせた白音に彼等の情報を聞きアリアは情報料を渡そうとしたのだが白音はそれを断りその行動のせいかアリアの中ではお人好しの男子生徒という感じに覚えられてたからである。

「と…ころで…強襲科の…神崎アリアさんだよな?なんでここに?」

「ち、ちよつと用事があつただけよ、それよりも！アンタこそなんでもなんどこにいるのよ!？」

「なんでと言われても成り行きというかパーティーを組んでるからというか…それよりボクには白音夕紀しらおとゆきっていう名前があるんだけど…」

「わ、悪かったわね！つてそもそもユキは転装生チエンジでもないのに男性用の制服を着ているから紛らわしいよ！わかつたら風邪を引かないうちに服を着なs」「ガミガミ部屋の前でうるせえなく」へ?」

「え?」

「大声で騒ぐはいいが何か良いことでもあつたのか?というか聞き覚えのない声だが誰が騒いでんだ?」

とりあえずここまでの状況を整理しよう。アリアはまずイライラしながら確認もせず自分の記憶だけを頼りにしたせいで部屋を間違え、さらに白音と鉢合わせしたことで完全に廊下へ通じる脱衣場の扉を閉め忘れていた。しかし当時の目的地である羽牙のいる部屋は向かい側にありもし羽牙がそこを開ければどうなるか。

「あ、あーえつと…なんかすまん」

「ツ!!け、ケイ…!!」

「な、ななな!?見るな!覗き魔!ヘンタイ!女の敵イ!風穴あけるわよ!」

それはストレートに脱衣場のなかを見れてしまうわけであり白音は風呂上がりとは別の意味で顔を真っ赤にしアリアは容赦なく羽牙にガバメントをむけた。

「まで!ちようどお前で隠れて大事な所は見えてないから!ホント動くなガk!…かんざしアリス!」

「アンタもアタシのことをガキつて言おうとしたわね!?それに名前は神崎アリアよ半分しか合っていないじゃない!!」

「落ち着けえ!教室ならまだしもここで銃を抜くんじゃねえええ!」

「それよりもケイはこつちみないでくれるかなあ!」

三人称 side

「アツハツハツハツハ！やべえ腹イテエ！お前ら最高だわ！しかも羽牙にいたってはどんなラツキースケベだよ」

「うう〜…！」

夕飯時、リビングに全員が集まり食事をしているなか予想よりも少し斜め上を行った結果を聞いて尋耶は笑い先ほどの出来事を思い出して白音は顔を真っ赤にしていた。

「コイツらが来たことを知らない俺にとっては防ぎようのない事故なんだぞまったく…。それよりキンジ達は何しに来たんだ？夕飯を食べるために来たわけでもないだろ」

「そうだな神崎が話したいヤツらがいるから案内しろなんて言うてるから案内したまでなんだがな」

「んでそこんとこどうなんだ神崎？…：…おい神崎？」

羽牙はこの話はヤメだと話題を変えキンジにアリアを連れて来た目的を聞く。だが肝心の本人はその会話を聞いておらずなぜか尋耶の食べているモノをまるで異様なモノをみるように見ている。

「アンタのそれはラーメンなのよね？というか本当に食べ物なの？」

「何を当たり前のことを言っている？それに怪しく思うなら食ってみればいい」

「神崎やめとけ！尋耶の食べているそれだけは絶対にダメだ！」

尋耶は「食うか？」と自分のどんぶりの中身をレンゲですくいアリアの前に差し出すしかしキンジはその正体を知っているのか全力で止めにはいった。

「なによ？ただスープが真っ赤なだけのラーメンなんですよ？知ってるわよたしかコレ麻婆ラーメンっていうのよね」

「神崎、俺からも忠告しとく。悪いことは言わねえ止めとけ…：地獄を見るぞ？」

さらに羽牙にまで忠告を受けたアリアは「そんなに言うならわかったわよ」と不思議そうな顔をして自分の麺をすすする。しかし尋耶が言った一言が余計だった。

「まあそうだなこの麻婆の美味しさをわかるヤツなんて一握りだ、理

解しようとしないうつには一生解らないだろうさ」

「なんですつて!?!つまりアタシがお子さまだつて言いたいの?」

「そういう訳じゃないさ神崎。ただお前には早すぎるんだよ」ハフハフ

「上等じゃない!貸しなさい!」

そして尋耶と無言で麵をすすめるレキ以外の全員の制止を振り切りレンジに乗っている真っ赤な麻婆を口の中に入れる。それを見た白音は「ボ、ボク牛乳取ってくる!」と言いあわててキッチンに走っていきキンジと羽牙はもう知らないと言顔を背ける。

「……………」

そしてアリアの思考は停止した。なぜなら脳が余りの辛さに辛かったということを確認してくれないからである。だが直後白音が持ってきた牛乳が救いとなったのそれを反射的に飲み干し事なきを得たのだった。

「辛ッ!いや喉がいたい!?!なによこれ口と胃が焼けただれた感覚がして手の震えと嫌な汗が止まらないんだけど!なんなのよこの劇物は!?!」

「劇物とは失礼な…ただ知り合いの特製ラー油を湯水のごとく使い、鷹の爪と華北山椒をふんだんに入れた麻婆ラーメンだぞ?それにコレ一杯で1日分のカロリーを摂取できるからそこら辺のエネルギーリンクより効果的だ」

「なによその女性に食べさせてはいけないワーストワンに入るゲテモノは!?!そもそも麺自体が無いじゃない!アンタさつきからレンジしか使ってないけど本当に入ってるの!?!」

「一々細かいことを気にしすぎなんだ神崎!麺なら麻婆の底に申し訳程度に入っているからいいんだよ!」

そうして尋耶の食べている劇物麻婆のせいで二人は言い争いになり当初の話からかなり脱線し夕飯の時間が過ぎていったのだった。

「さて、腹もふくれたし本題…の前に改めて自己紹介からいくか。俺

は羽牙慶介こつちが風音尋耶んで神崎の隣の席だから知ってると思うが遠山キンジだ。ちなみにもつと細かいプロフィールが必要なら探偵科にでも頼め」

「そうね、神崎・H・アリアよアリアでいいわ私もハガとジンヤって呼ぶから。あとアンタ達の情報は収集済みだから心配しないでいいわよ?」

羽牙は簡単な自己紹介だけを済ましアリアも同じように済ませる。そして自分達の個人情報既に入れているとつげたアリアに尋耶は「ほう」と呟き羽牙も「聞かせてもらっても?」とテーブルの上に頬杖をついた。

「まずハガの方ね東京武偵校二年強襲科所属ランクはAランク(R)。なおかつガンスミススのライセンスをクラスVIまで取得。でもそのライセンスがありながら装備科の自由履修すら受けずタチの悪いことにその辺の装備科よりも腕が良いことからあだ名は『装備科泣かせの羽牙』『エセ装備科』」

「ちよつと待ってくれ。前から気になってたんだが最高ランクのRランク武偵でもない羽牙のランクのあとになんで(R)が付くんだ?そもそもこいつは…」

「キンジ、余計な事は掘り返さなくていい。それに俺はこのランクで満足してるしわざわざ変える気もないしな」

アリアはまず羽牙について調べたことを述べていき羽牙はそれを楽しそうに聞いているだかキンジはその中で前々から疑問に思った点がありアリアに羽牙がなぜAランクなのか言おうと所羽牙に止められたのだった。

「キンジが言いたいこともわかるわでもねハガのランクもあながち馬鹿に出来ないの」

「なぜなんだ?」

「アタシも見るのは初めてよ。(R)付きの武偵:Reserveと呼ばれるSランクのなり損ない」

「っ!?!:おいアリア予備ってなんだよまるで人をモノみたいに!」

「落ち着きなさいキンジ、まだ話は終わってないわ」

「そう言い癩癩を起こしたキンジを止めアリアは話を続ける。それはまだ武偵法が成立した当初ランク付けの基準が曖昧な時に出来た言わばSランクの順番待ちの称号だったという。」

「そして法の内容が改定されていくにつれ（R）の称号はSランクの実力を持つているが人数の関係でなれない武偵、もしくはSランクの実力が在りながらも昇格を辞退した武偵の印になったのだ。」

「というわけよ、だからハガはSランク武偵と似たようなものだしにAランクながらもSランクの任務もうけられるのよ」

「まあ、そう言うわけだキンジ。俺自身もこの記号の意味が分からなくて先生に聞き回ったもんだ。それに一時期名称の変更案が出たらしいが付けている連中が少ないせいとお蔵入りになったからこの名称のままであって悪い意味じゃねえ」

「次にジンヤね。東京武偵校二年狙撃科でレキと同じSランク。さらに自由履修にて強襲科Bランクを所しジンヤのキリングレンジは……」

「どうしたアリア、尋耶のキリングレンジがどうかしたのか？」

「アリアは頭の中に入っている尋耶の情報を開示していくしかしなげかアリアはキリングレンジの事で尋耶を怪しむ目で見た。」

「2500mよ……」

「え？」

「2500mよ！あくまで噂程度と言われているけどあり得ないわ！」

「んな!?2500m!?何かの間違いじゃないのか？」

「落ち着けよ二人とも。噂は噂だ信じるかは相手次第だしそれはお前も例外じゃねえさ」

「尋耶のキリングレンジを聞き驚く二人だが尋耶はただの噂だと切り捨てる。だがそれでも強襲科のBランクと狙撃科のSランクを取得しているためアリアは自分の調べた情報が本当に会っているのかと困惑するのであった。」

「まあ、なんであれよく調べたな。だがそれだけじゃないんだろ？」

「そうね、調べた理由は話けどこれは他言無用よ？」

「なら話も少し長くなりそうだし休憩がてら場所を変えようぜ？」
「変えるってどこに？」

アリアが羽牙の情報を話終え小休憩を挟もうと椅子から立ち上がった羽牙はついでに場所の変更を提案するそしてアリアはコテンと首をかしげキンジもその事を質問する。

「決まってるだろ？まあ、そこまで調べた景品つつうか気まぐれだが
見せてやるのさ俺の作業場^{工房}をな」

武偵殺しへの逆恨み

羽牙 side

「ようこそ、俺の作業場へ」

「な、なによこれ……これが作業場？武器庫の間違いじゃないの？」

羽牙に案内され先ほど間違えたバスルームとは反対側の扉開ける、するとそこにはまず勉強机のような所々に引き出しがある作業台、隣には数々のパーツやガンパウダーとリローディングキット、さらにリアの目を引いたのは壁に掛けてある銃器の数々と横一メートル位の黒い頑丈そうな箱であった。

「下手に作業台の上はさわるなよ？中にはお得意さんの銃だつてあるんだからよ。それより飲みのもはジュースでいいか？」

そう言い羽牙は作業台の横においてある小さな冷蔵庫からジュースを取り出しアリアとキンジに渡し近くの椅子へと座った。

「さてと、デモンストレーションはここまでか？神崎アリア」

「よくわかったわねジンヤ。そうよ、今までのアンタ達へアタシが何処まで出来るかという簡単なプレゼン。ここからが本題よ」

「おいアリアそれってまさか!？」

「ジンヤ！ハガ！アンタ達アタシのドレイになりなさい！」

「やっぱりかー!？」

アリアが羽牙達のことを調べここへ乗り込んできた意図を理解していた尋耶はその事を質問しアリアは満足気に頷く。だがキンジはアリアが何を言おうとしているのかを薄々勘づいていたのかその爆弾発言を聞くなり頭を抱え……………。

「……………」

その場の空気が凍りつき。

「じ、尋耶？今コイツは冗談で言ったんだよな？俺にはどうも聞き捨てならない台詞が聞こえたんだが…」

「羽牙、諦める現実是非情なんだ……ホントあれだよ、期待した俺がバカだった……それに」

(コイツ相当危ない娘だ！)

余りの残念な言動に二人の思考が一致した。

三人称 side

「おい、尋耶どうする!? 奴隷だつてよ奴隷!」

「(わかってんだよコツチだつて! とりあえずなんとなく理由を付けて廊下で作戦会議だ!)」

「なにを二人でコソコソ話してるのよ?」

「いやあ、なんでもないさ神崎。とりあえず少し相談させてくれ」

「そ、そうだぞか、神崎ちよつと待っていてくればいいからさ? ほらその壁に掛けてある銃なら見てもいいから。あとついでにキングを借りてくぞ?」

「お、俺も!」

アリアの爆弾発言のあと停止していた思考を何とかフル稼働させ本人が自分もかと驚くなか羽牙と尋耶はキングの襟元をわしづかみ慌てて廊下へと出た。

「おい、どうすんだアイツ! 奴隷だぞ奴隷イギリスの武偵校はそんなことまで教えるのか!」

「ま、待て羽牙。もしかしたらアイツは疲れてるかもしれないぞ? ほ

ら、今朝のトラブルのあと俺達の事を調べようと頑張ったんだ疲れて下ネタ位言いたくもなるさ」

その時リビングの方からクシユンという可愛らしいくしゃみが聞こえ羽牙達の耳に予想を裏切る会話が聞こえた。

『白音さん風邪ですか？もしそうなら風邪薬を持ってきますが』

『大丈夫だよレキ、多分少し湯冷めしただけだからさ』

『そう言えば先ほどバスルームでの会話を聞いていましたがアリアさんと白音さんは何処かでお会いしたんてすか？』

『耳がいいねレキは。うんそうだね、実は昼間任務を終えて探偵科の方に報告に行った帰りに神崎さんとバツタリ出くわしてね、ボクのリンクを聞くなり羽牙と尋耶の事を聞いてきたんだよ』

『ではアリアさんがあれほど詳しくかったのは？』

『うん、ボクが教えたんだよ。でも学校で流れてる当たり前の噂だったからお金はもらえないって断っちゃったけどね』

その瞬間更にその場の空気が重くなり尋耶と羽牙はその場でorzの体制になっていた。

「嘘だと言ってよバー〇イ……」

「ウソダドンドコドーン!!」

「ちよつと待ってくれ二人ともどうしたんだ!?!いきなり絶望したり騒いだり今日のお前ら少しおかしいぞ!」

「キンジザアーン!?!オンドウルルイッテルンデイスカー!?!」

「お、おちおちつけ羽牙。ままだあ慌てる時間じゃない」

「尋耶、羽牙は別としてお前絶対わかってやってないか?」

「チツ、バレたか…まあいい。いいかキンジ、あのアリアとかいう娘は俺達に奴隷になれって言ったよな?」

「(さりげなく舌打ちしたよコイツ…) ああ、でもそれは…」

キンジは半ば混乱状態?の羽牙を放っておき尋耶の間に答えるだが尋耶はキンジの言いたいことを聞く前に話を続けた。

「つまりはだ、あれだけ癩癩を起こしやすくしてプライドが高いアイツは日頃のうつぶんをSMプレイで発散しようとしてるんだ」

「俺達でな」と続けた尋耶は羽牙の頬をひっぱたき正気に戻すと目

頭を押さえながら真剣に悩み込んだ。

「正直イギリスからの転校生ってことで俺の中で期待していた自分がいたのかもしれない…だけどなキンジ俺はノーマルなんだっ！自慢じゃないがレキつつう彼女もいる！だからあんなどこで覚えたかわからないサデイストっ娘に調教される日々が来るならテロリストの穴蔵に突撃かけた方がマシなんだよ！」

だがそこで正直に戻り思考がクリアになったのかふと羽牙がこんなことを言い出した。

「そう言えばキンジお前今朝セグウェイを無力化したあと神崎と戯れてたけどあの後どうなったんだ？」

「どうって？俺はアリアを転ばせた後普通に教室に歩いていったが」

「それが真実か？」

羽牙は今朝の事を思い出しキンジに真実を問いかけキンジは再度「どういうことだ」と聞き返す。

「いいか、お前は今朝セグウェイをあの状態で無力化してたんだよ。それにお前はあの時ベルトをしていなかった理由を未だクラスの連中にすら明かしてない」

「ちよつと待ってくれ!?確かにアリアにベルトを貸したのは事実だがそれはアイツのスカートが壊れてて…」

「壊れた？壊したじゃなくて？理子の言うとおりナニかあったんじゃないか混乱に乗じて神崎を調教したとかな」

「っ!?!まさかあの偏った知識はお前が…!クソツ!そこまで鬼畜だとは思わなかったぞキンジ！」

「まてまて！…どうなったらそこに行き着く！お前らしい加減に…あつ…」

「言い訳する余裕もなくなったか…これは黒だな羽牙」

「そうだなこれでこいつも終わる」ええ、アンタ達がアタシの事をどう思ってるかハッキリ解ったわ」へ？」

キンジが尋耶たちに今朝の説明をしようと慌てるしかし尋耶達はキンジの話を聞かずそのままワイセツ罪で逮捕しようと捲し立てるが居るはずのない第三者の声に気付き振り向くとそこにはいい笑顔のエリアがいるのだった。

「覚悟はできてるわよね？答えは聞いてないけれど」

羽牙 side

「イツテえ…半分冗談でやってたつてのになにもここまでやることはないだろ…」

「前が見えねえ…」

案の定ぶちギレたエリアにボコボコにされた二人は先ほどの作業場にて殴られた場所を冷やしつつ今度こそ真面目にエリアの奴隷という発言の意味を聞く事になりそれを理解した二人はその真意を聞いた。

「つまり自分が組むパーティーに入って捜査の手伝いをしろと？」

「そうよ…今度は真面目に聞いているようね」

「まあな、しかしだな俺達だってパーティーを組んでは知ってるよな？それを無視して自分の要求を一方的に押し付けるほどお前は愚かじゃないだろ。それとも俺達のパーティーごと吸収するのかわ？」

「いいえ、レキたちには悪いけど今回は相手が相手だから組むのはアంత達とここに居るキンジだけよ」

「なら相手くらい教えてくれないか？それなりに名前とか団体名とかあるんだろ？」

「そうね、今アタシが追っているのは武偵殺しよ。訳あって細かいことは話せないけれどコイツはアタシが追っている組織の一人で必ず捕まえなきゃいけないの」

「っ!？」

その瞬間羽牙と尋耶の雰囲気が一変し途端に表情が険しくなったが薄気味悪い笑いをケタケタとしはじめエリアは困惑した。

「なるほどなるほど『武偵殺し』か…クククツ」

「なんなら手を抜くわけにはいかねえよなあ？ 呵呵呵」

「なあ、神崎アリアひとつ質問したいそれは俺達への依頼か？」

「え？ そ、そうね。アタシからアンタ達への依頼と受け取ってもらって構わないわ！」

「そうかそうか。それなら上々だ」

「キンジこの二人どうしたのよまるでさつきと霧囲気が違うんだけど」

「気にするなアリア…コイツらは只の逆恨みだ…」

アリアから正式な依頼を受け取った二人はこれで容赦なく武偵殺しを叩き潰せると息巻く。しかしアリアは自分が依頼した人間が^{命知らず}デスペラードという二つ名を持つヤツらだとは知るよしもなかった。

アリアの秘密と戦妹

キンジ side

「武偵殺しか…」

「うへへえ…ももまん食べ放題〜」

「ハア、起きているとあれだけ騒ぐコイツも寝てれば大人なしいな」

あの後尋耶達との会話を終え、あとは寝るだけとなったキンジはベッドの上に寝転がり一枚のメモ用紙を見つめながらに言う。

「全く、恨むぞ兄貴…」

そして今は亡き兄への愚痴をこぼしながらそのメモ用紙を生徒手帳に大事にしまい就寝するのだった。

尋耶 Side

「ハア…なんで俺がこんなことしなきゃいけないかなあ。依頼したのは羽牙だろうに」

次の日、五時限目以降の時間帯に尋耶はため息を吐きながら探偵科のある建物へと向かっていった。

「アイツの相手は疲れるんだよなあ…主に精神面で」

そうしてブツブツと文句を言いつつ昨日の事を思い出す。それはアリアから依頼を受け解散したあとの出来事だった。

「さて、これから忙しくなるが一つ気になることでも調べるか」

「武偵殺しの事か？それならヤツがやらかした事件と言えば今のところシージャックとキンジのチャリジャックだけだろ？」

「いいや違うぞ尋耶。アイツ、神崎アリアのことだ」

『はーい！みんなのアイドルりこりんだよ！今ちよつと取り込み中で電話にでれませ〜ん！なので後々かけ直してね♪バイビー！』

そう言い羽牙は探偵科の理子へと電話をかける、しかし留守番電話なのかメッセージを聞いたとたん羽牙は顔をしかめながらに続けた。

「そうか、ならお前恥ずかしい情報ワースト3を武偵校のホームページへ掲載しといてやるよ」

『それは人権侵害というやつじゃないかな?!』

「やつぱりホラ吹きメッセージじゃねえか、それにお前の恥ずかしい情報なんて一つも持ってねえよ」

『むう！騙したな！乙女は美容のためにもうねる時間なんだぞ。それにもしてお肌ガサガサになったらはつくくんが責任取れるの？』

「そんなときはコンパウンドでツルツルに磨いてやんよ」

『理子は乙女は乙女でも鋼鉄の乙女じゃないんだよ!』

「まあいいさ、それよにお前に依頼したいことがあるんだがお前って確か探偵科Aランクだったよな？」

『うげ〜！はつくくんがランクを聞く辺り嫌な予感がするんだけど？もしかして危ない依頼？』

「よくわかったな褒美として依頼料に少しオマケしといてやるよ」

『うわあーい！嬉しくも悲しい情報だあ！ところで命に関わる仕事じゃないよね？』

「安心しろグレーゾーンギリギリの調査にはなると思うがある人物について調べて欲しい」

『何一つ安心できないんですがそれは!』

「最後まで聞けよ？神崎アリアについての情報が欲しいんだ裏側も合わせてな」

『ふーん？でもなんで急に？あつ！もしかして犯人逮捕を手伝えー！とか依頼された？』

「そのまさかだよ。だからビジネス相手の情報くらい持つところと
思ってたな」

『クソツ：オルメスのやつ！厄介な事を』

「なんか言ったか？」

『なんでもないよー!』

「別にそこまで大変な仕事でもないから頼もうと思ったんだが…まさか面倒とか思ってたないよな？」

『い、いいや〜！ソクナコトナイヨ?』

「んじゃ、そう言うわけだから明日の昼までに頼むな〜!」

『ちよつと待ってはつくくん！明日の昼まで!?!それは無理だよお！それとも理子に徹夜しろと冗談だよね？嘘だと言ってy』ブツツ

「まあそう言うわけだから尋耶ちよつと頼み事きいてくんね？」

「ふざけんなよてめえ…」

そして時間は現在にもどる尋耶は探偵科の建物の前にいる少しやつれた理子に気付き手をヒラヒラと振るすると向こうも尋耶に気付いたのか近寄ってきたのだった。

「や、やあじんくん今日も元気そうだね…理子はベッドが恋しいよ…」
「お、おう互いに災難だったな理子…今回ばかりは同情するわ。ほら、羽牙からの依頼料、ついでにアイツからのオマケと俺からの謝礼もいれてあるから」

尋耶は理子から書類の入った封筒を受け取り中身を確認していく。そして理子は尋耶から依頼料の入った封筒を受け取り中身を確認すると目を見開いた。

「じ、じんくんこれはもらいすぎじゃないかな？理子ちよつと怖いんだけどまだ何かあるの？」

理子が封筒を開き10枚ほどのお札が現れるそこには福沢諭吉が全てのお札に描かれており、不安になった理子は思わず尋耶に質問するのであった。

「正解だ。話はつけてあるからこれだけキンジに渡しといてくれちなみにだが今日中にな？あとこっちの情報は覚えたから処分するぞ？」

尋耶はアリアに関しての表の情報が書いてある方を封筒に仕舞い理子に渡し裏の情報が書いてある書類を道端に置きゴソゴソとポケットを探るとそこからライターを取り出し燃やし始めるのだった。
「嘘でしょ!?!しかもせっかく調べた書類をなんで燃やすかなあ!?!もういやだあ!理子柔らかオフトウんでふて寝したい!」

「頑張れよ理子。先は長いぞ?」

三人称 side

「なるほどな、ヨーロッパの武偵で強襲科のSランク、しかも二刀流と二丁拳銃を使いこなすことから双剣^カ双銃^ドのアリアね…あの人とどっちが強いんだか」

「まあ、手段を選ばない点を考えたらあの人のほうがつよいんじゃない

ねえの？んで次だ」

放課後、羽牙の作業場で尋耶が知り得た情報をホワイトボードに書き込んでいく。しかし羽牙はあらかじめ依頼しておいた裏側の情報を確認し。

「なにになに？母親がかの武偵殺しの罪で捕まりで様々な容疑が発覚し絶賛服役中しかも刑期か536年か…」

「バツカじやねえの？」

心底あきれた声でそう言った。

「あー、やめだやめ！こんなことやっつてられっかよ！懲役536年？しかも武偵殺しの他にも色々な犯罪を犯してます？本当にバカじやねえの!？」

「お、落ち着け二度もいうな！羽牙の言いたいこともわかるから！つか俺だつてこの情報を見て思わず書類を燃やしちまったよまったく!？」

ガラガラと今まで真剣に考えていたことが音を立てて崩れていき怒りを露にする羽牙に対し理子に会ったときにその事を知り得ていたからこそなんとか落ち着いている尋耶は羽牙に同情するも疲れた表情をしていた。

「じゃあなんだ？神崎の『訳あって言えない細かい事』ってやつは母親のためにこの武偵殺しの一味を捕まえて冤罪を晴らすってことか？」

「だろうな、しかも人数も不明、組織の大きさも不明な奴らをノーヒントでだ」

「おいおい…そんなの砂浜からガラスの粒を見つけるようなもんだぞ？…」

「最悪神崎には悪いが断るしかないのかもな…」

羽牙 side

「ふっ！やつ!!」

「うおっと!?!やるねえ!」

翌日、強襲科の学舎にて体格差の違う男女が近接格闘の練習をしており。ており一人は金髪のポニーテールが特徴的な女子である火野ライカでありもう一人は羽牙であった。

「ここだっ!」

「残念!そっちはフェイク!」

「うわあ!」

そして数分間における格闘戦の末羽牙のフェイクに引っ掛かり見事に足を払われ尻餅をついたライカは目の前に拳を突きつけられ降参した。

「つうわけでお疲れさん火野ちゃん。後で反省点をいつものノートに纏めて尋耶に渡しとけ?そうじゃねえと次に生かせないからな!」

「あ、ありがとうございます!羽牙先輩」

「いいってことよ。それに尋耶のやつは自由履修で強襲科に入ってるからな、どうしても来れない時くらいは相棒の戦妹の面倒くらい余裕で見てやるさ」

「でも、やっぱり申し訳ないと思うんですよ…先輩にだって戦妹は居ますしアタシみたいな後輩のために…「ちよつと違うぞ火野ちゃん」え?」

「第一そんな色眼鏡で見てもらうほど俺はマトモなやつじゃねえよ。それに俺は尋耶のためにやってる訳じゃねえ、最低限俺のスパークリ

ングに合わせられる後輩が火野ちゃんしか居ないってだけで特に意味はないんだよ」

羽牙は「俺知り合い少ないからさ」と苦笑いしながら続けライカに手を差しのべ起き上がらせる。そしてライカは「あはは…」と同じく苦笑いしポリポリと頬を搔いた。

「それに尋耶が言ってたぜ『ライカは見込みがあるから戦妹にしたんだ。そうじゃなけりや単位獲得のために適当な後輩を選んでたさ』ってな」

「ほ、本当ですか!」

「おう、だから自信をもて!あと、ついでと言っちゃなんだが俺の戦妹とも仲良くしてやってくれないか?アイツは気が弱いから」

そう言い羽牙は「そんじやまた今度」といいシャワールームへ向かいライカは「ありがとうございます!」と頭を下げ羽牙を見送るのだった。

任せてください!」と頭を下げ羽牙を見送るのだった。

尋耶 side

ここは学園島にある狙撃科の学舎。

「ふむ。右に少しずれたか…」

尋耶はそうつぶやきスコップを調節し再度標的に狙いを定め引き金を引く。すると弾丸は吸い込まれるように的のだ真ん中あたり風穴をあけた。

「よくメンテできてるな、流石に最後のスコップなどの調整は人によって変わるし実際撃って見なければわからないから合格点だろう」

「あ、ありがとうございます!じ、尋耶先輩!」

「そう堅くなるな。お前は狙撃科じゃなくて整備科なんだから弾が真っ直ぐ飛ぶ代物にすればいいんだよ、そこんどこわかってるか?藤咲」

そうして尋耶は持っていたスナイパーライフルを自分の横で見ていた気弱そうな後輩藤咲志麻に渡す。そして藤咲は「は、はひ!」と

言いながら受け取ったライフルを抱え込みながら頷いた。

「え、えつと尋耶先輩、違和感とかありましたか？い、いえ！別に尋耶先輩の感覚を疑ってる訳ではないんです！ただ羽牙先輩からこちらのミスを無くすにはまず撃ち手の感覚を第一にと言われてまして！」

「そうだな、今回使ったのはレミントンのM700だが俺が使ってるモノより幾分か引き金の遊びが広がったな。まあ俺は用途に応じて銃を使い分けてるからそこまで苦でもなかったが…」

「で、では一人によってその感覚が違うということですね？」

「そうだな。人によって指の長さが違ってくるもだから特にスナイパーライフルなどの精密射撃を行う銃に限っては重要になってくるかもな？」

藤咲はメモ帳に尋耶の意見を「な、なるほど…！」と事細かに書き込んでいくと尋耶はその様子を見てコイツらしいなと微笑むのであった。

「さすが整備科泣かせの羽牙の戦妹なだけあるな。普通の整備科連中なら悪いところがないかちよちよいとメンテして微調整はは二の次つてのによ」

「た、たとえランクがBだとしても『自分が徹底していれば後は使い手の問題だから心配する必要ない』は、羽牙先輩が言っていましたから…！」

「なーるほど、だから羽牙のやつ俺に藤咲の整備したライフルを見てくれなんて頼んだのか…」

藤咲は弱々しく「は、はい…」と返事をし尋耶は羽牙から渡すよう頼まれたガンケースを藤咲に見せる。

「まあ整備の方は合格だから次の課題だなんでも「待つてくださいい！」は？」

だが尋耶が課題の内容を言おうとした瞬間聞き覚えのない第三者の声がするのだった。

おこなのか尋耶くん

尋耶 side

「ちよつと待ってください！」

「は？」

聞き覚えのない第三者の声に反応し尋耶は後ろへと振り向く。すると藤咲すら知らない男子生徒が尋耶へと近寄ってきており近づくなり大声をあげた。

「尋耶先輩！なんでそんなヤツの面倒を見てるんですか!? 尋耶先輩には確か火野ライカとか言う戦妹が居たハズなのにどうしてそんな…」
「なあ…ちよつといいか？本当にわからない事があるんだがオマエだれ？」

「ふぎけないでください!? 最初に先輩へ戦兄弟の申請をしに来た狙撃科Aランクの久藤ですよ！」

そう言われ尋耶は真剣に考え込み彼を思いだそうと必死になるしかし尋耶は。

「ごめんな、えつと久藤だっけ？記憶にないわ…」

全く記憶にないのか申し訳なく告げた。

キンジ side

「ヒヤツハア、ファイバーだぜえ！」

「お、おい羽牙…当てるはいいがこつちも使いきれないぞこれ」

放課後、学園島にあるゲーセンにて羽牙は備え付けのスロットマシンで大当たりを引き既に三箱近くのメダルを獲得しその様子を見ているキンジは半ば呆れていた。

「いやあ！ありがとなキンジ！お前が誘ってくれたお陰で大儲けだ！アツハツハツハ！」

そしてなぜ羽牙はこんなに機嫌がいいのかと言うのは少し前に遡る。

それは強襲科の自由履修の届を出しに行こうと学舎の前へやって

来たキンジなのだが偶然会った理子からゲーセンのメダル交換券を貰いそこへライカとのスパークリングを終え学舎から出てきた羽牙とキンジを見つけたアリアが合流し今に至る。

まずキンジとアリアはれおぽんというマスコットキャラがキーホルダーになったモノをクレインゲームで狙い始め羽牙はキンジからメダル交換券を貰いスロットコーナーへと消えていった。しかしれおぽんを獲得後合流しようとして羽牙を探し二人が目にしたものはメダルが入った箱を積み上げ派手に発光するスロットマシンの前に座っている羽牙であり余らせるわけにもいかないキンジ達は頑張つてメダルを減らすのであった。

「キンジ！どうすればいいの!?!こっちも真ん中の大きなルーレットが動き始めたんだけど!」

「羽牙ア！いい加減止めてくれえ！」

尋耶 side

その頃尋耶はいきなり怒鳴つてきた久藤という後輩に軽く謝罪をし本人のことを覚えてないと伝える。だが本人はその事に納得がいかないのか怒りのボルテージをさらにあげた。

「覚えてないって…じゃあなんでその落ちこぼれだったり男女の火野ライカのこと覚えてるんですか！もういいですよまったく！先輩と言いいレキ先輩といいなんなんだよ！」

立ち去ろうとする久藤がさりげなく愚痴をこぼすだがそのなかにレキの名前が出てきた途端尋耶の眉間がピクリと動き久藤に質問する。

「待てよ今レキのって言ったか？そうなるともしかしてお前レキにまで戦兄弟申請をしに行ったのか？」

「ええ！そうですよ！しましたよ！でもあの僕が戦兄弟申請に行つてなぜ自分なのか？なんて言われて尋耶先輩に断られたと聞いたとたん『アナタは尋耶さんに断られたことの意味を理解できていないのなら私の戦兄弟になれるとは思いません』何て言われたんですよ！」

「く、久藤くんこれ以上はせ、先輩に失礼なんじゃ…」

そして久藤はレキに戦兄弟申請を断られた理由を半ばヤケクソ気味に話すだが自分を止めようとする藤咲を八つ当たりの対象と見たのか今度は彼女に当たり散らした。

「五月蠅い！落ちこぼれは黙ってろ！そもそもなんでお前見たいなヤツが羽牙先輩の戦妹になれるだけじゃなく尋耶先輩にまで面倒みてもらえるんだよ!？」

「そ、それは…!」

「ああ、言わなくてもわかるさ！どうせその貧相な体で誘惑したんだろ？それで簡単に引つ掛かった！火野ライカだってそうだ！強襲科の癖に狙撃科の尋耶先輩をハニートラップに陥れて自分のものにしたんだ！そうに決まってる!」

「く、久藤くん！私の悪口を言うのはいいけど羽牙先輩の悪口を言うのは聞き捨てなりません!」

「なんだよ言うようになったじゃないか落ちこぼれ！そうだよなお前の後ろにはあの羽牙先輩がいるもんなア!」

藤咲に注意され神経を逆なでられたのか久藤は藤咲へと標的を変え怒鳴り散らす。だか久藤は何かを思い出したのか嫌な笑いを浮かべ続けた。

「そう言えばこんな話を聞いたことがあるぞ！お前影で疫病神って呼ばれてるけどさあ！その理由ってお前は自由履修で整備科に行ってるけど本来はSSR科でその力は過去が影響してるらしいな?」トントン

「や、やめて…わ…ワタシは…!」

そしてその話をした途端藤咲の肩が震え始めその場にしゃがみこんでしまうがそれでも久藤は続ける。

「ほら言ってみろよ！お前の薄汚い過去をさあ!」トントン

「あ…ああ…!」

「おい黙ってないでなんとかかって…さつきから何だよ鬱陶し…っ!?!」トントン

未だに現実に帰ってこれず尋耶は仕方なく藤咲の目の前で指を弾くと彼女はまるで催眠術が解けたかのように呆然とした。

「あ、あれ？私今…何かとても嫌なことがあったような…」

「気が着いたか藤咲？急に考え込んでプルプルしてたが何かいかがわしい事でも想像してたんじゃないのか？」

だが尋耶はまるで今のことがなかったかのように振る舞い藤咲をからかうが彼女はその事を本当に想像してしまったのか顔を真っ赤にした。

「そもそも、そんなことありません!?決してです！」

「ええ〜？ほんとにごさるかあ〜？」

羽牙 side

「ほー？そんでムカついて思わず威圧しちゃったと？」

「まあな…あー、まだイライラするつかあの…：…なんだっけ？謎の後輩は何様なんだ？」

夕方ゲーセンから忘れ物を取りに武偵校へと戻ってきた羽牙は狙撃科の学舎から見知らぬ後輩が逃げるように走り去っていくのを見つければ面白そうだと中に入るとそこには尋耶がおり羽牙は先ほどの出来事を聞いたのだった。

「ところでさつきまで志麻のやつもいたんだろ？何処行つたんだ？」

「藤咲ならお前からの課題を終わらせるって張り切って帰ったよ。まったく…こんなことなら一発ぶん殴つとけばよかったよ」

「その割にさつきからワンホールショットしてるのは誰なんですかねえ…」

「只の精神統一だ気にするな」

そして尋耶は感情に流され格下相手を威圧してしまった先ほどの自分に腹をたて、鬱憤晴らしのために藤咲から受け取ったライフルの弾倉を二つほど空にしながらも的には一点の穴のみしか空けていなかったのだった。

Over kill (序)

羽牙 side

「神崎さんの依頼を断ることになった？それだと武偵憲章二条を破る結果にならないかい？」

「本当に耳が痛くなる言葉だが：此方だっていつまでもその依頼に付きつきりつてわけにはいかないだろ？」

とある早朝羽牙と白音の二人は羽牙の車に乗り学校へと向かっている中、アリアの依頼に関してどう対処するかという話をしており羽牙は尋耶と決めた方針を白音に話した。

「それもそうだけど：手段が無い訳でもないんでしょ？」

「まあな、だがそれは最終手段だ。なにせこれまでの手口を考えるに武偵殺しがやむを得ず表舞台に出てくるなんて方に一つの確率だし、逆に引きずり出せるっていう確かな理由がないとこっちが自滅するだけだ」

白音は羽牙の話を聞き「ボクの方でも調べようか？」と言い出すが羽牙は「大丈夫さ」と断りそこから何気無い会話をしつつ武偵校へと着く。すると二人の携帯が同時に鳴り二人は顔を見合わせるとそれぞれ相手へと応答するのであった。

白音 side

「もしもし？どうしたの神崎さん」

『シラオト！良かったわアンタ今どこにいるの!?!』

「ぶ、武偵校の生徒用の駐車場にケイと一緒にだけどなにかあったの？」
武偵校へついた途端に鳴り始めた二人の携帯、そして白音の携帯へ連絡してきたのは先日偶然知り合い羽牙達の依頼主となったアリアであり、何やら急いでいるのか唐突に話を進めた。

『ええ、実は厄介な事件が起きてアイツらの力を借りたかったんだけどジンヤしか連絡がとれなくて、キンジがシラオトならハガと一緒にじゃないかって言ってくれて助かったわ!』

「そそうなんだ？それよりまた武偵殺しの犯行？」

『そうよ！だからハガ達が近くにいて助かったわ！あと悪いけどすぐにそこにいくからハガに話しておいてくれない？』

「わ、わかった！ケイにはボクから話しておくから駐車場で合流しよう！」

『わかったわ！ところでアンタ達の車ってあと二人乗れるわよね？』

羽牙 side

「ほいほい？どうした尋耶朝っぱらから電話してくるなんて珍しいな？」

『羽牙、奴さん動きやがったぞバスジャックだ！』

「マジかよ!?!場所は？」

『男子寮前のバス停を通過してからお台場方面へと進路を変えたらしいが俺らにとって重要なのはそのあとだ』

「なんだ？バスに爆弾がつけられてる以上に厄介なことでもあるのか？」

『ああ、なんでも横に改造された無人のスポーツカーがいて時速60km以上で走行中らしい…いいか無人のスポーツカーだぞ？』

「それって…!」

『間違いなくつかわれたな…』

羽牙は尋耶から来た連絡の内容にさほど興味を示さないつもりであったのか軽い気持ちで電話に出るだがその内容が武偵殺しが絡んでおりそして彼らが武偵殺しを恨んでいる原因の一つが関わっていると知ると羽牙は表情を険しくした。

「クソッ！尋耶お前今どこにいる!?!回収してやるから場所教えろ！」

『悪い羽牙！今から神崎の指示でレキと待機しないとイケないんだ。だからそつちに神崎達を向かわせたから回収してやってくれ！あと後ろのアレはなるべく使うなよ!?!』

そして尋耶の電話が切れたと同時にアリアたちが羽牙の車へと合流し乗り込もうとする。

「ハガ！バスジャックよ武偵殺しがでたわ…! ってなによこの車一昔

前のファイアットじゃない!?こんな骨董品でバスに追い付けるはずないでしょ!」

「いいから早く乗れ!それとも今から車輛科に借りにいくか!」

「わかったわよ!」

そうしてアリアとキンジは後部座席へと乗り込むしかし嫌な思い出があるのかキンジは羽牙に質問した。

「羽牙、急いでいるのは分かるがお前に一つ聞きたいんだ。バスに追いつく為にあのトンデモ機能使う訳じゃないよな?」

「へっ?そうなのケイ?嘘だよね!」

「いやあくこの前車輛科に更に改装してもらったけどな?シカタナイヨナア緊急事態ナンダカラア!」

だがアリア達をのせた羽牙は不吉な笑みを浮かべると足元にある謎のレバーを引くのだった。

三人称 side

突如としてバスに爆弾が仕掛けられていると予告を受ける。だが状況のはそれだけに留まらず後ろから接近してきた無人のスポーツカーからの攻撃を受け生徒達は少なからず負傷したのだった。

「クソッ…防弾制服つっても当たると痛てえんだぞ…!お前ら全員無事か?」

「なんとかね、でもこれでボク達も迂闊に動けなくなった」

「ん?不知火、武藤なにか聞こえないか?」

「何かって?この状況で幻聴でも聞こえてんのか?」

「違う、なんかこう…叫び声のような?」

「確かになにか…いや、これは最高のタイミングで援軍が来てくれたかもしれないぜ?」

武藤が車内の状況を確認する中一人の生徒の言葉に、すると並走するスポーツカーとは別に後から接近する車が見えがその直後並走している車が突如としてクラッシュし後ろを見た武藤は思わず頬を吊り上げるのだった。

アリア side

「ハガアアアアア!? アンタもう少し速度を落とさない! そうじゃないと絶対に事故るから!? 絶対事故るとアタシの勘が言ってるから!」

「アリアの言う通りだ羽牙! いくら急いでいるとは言えもう少しスピード落とせ!」

「ケイ! この先カーブだけど絶対に転がらないよね!」

「お前らうるせえから少し黙ってる!」

武偵校の駐車場から出て数分後、道路を爆走する一台の小型車がありその中に座っている運転手以外の乗員は気が気ではなかった。なぜなら羽牙が足元にある謎のレバーを引いたとたん後部のエンジンハッチが開き車が出してはいけけない爆音を発しながらロケットスタートをかまし、更には数秒で速度メーターを振り切り本来その車が出せない速度で走行しているのだから。

「オラー! もう少しで追い付くぞ? ここから手が離せなくなるからインカムつけとけよ!」

そう言い羽牙は耳にインカムを挿し込みアリア達も同じように準備する。

「見つけた! あのバスよ! 横の車はアタシがやるわ!」

アリアは二丁のガバメントを引き抜きルーフを外した屋根から体を乗り出すと数発の弾丸を叩き込み一台の無人車輻を無力化するのであった。

羽牙 side

「武藤! 無事か? 無事だな! なら運転変われ! お前の方がコイツがイカれたときに居た方がまだマシだ!」

「マシってなんだマシって!? その車改造したの誰だと思ってる! 早々に壊れない設計してんだぞ?」

無人車輻を撃破後羽牙はバスの搭乗口の隣に並走しアリアとキンジそして白音を降ろす。さらに車輻科である武藤の顔を見ると車の運転が変わるよう指示した。

「当たり前前だろ！白音は応急処置のためにそっちに送っちまったし、もしこつちがターゲットになったら俺がスポンジになっちまうよ！」
「わかったよ乗ればいいんだろ!?おい他の車輛科！ヤバくなったら頼むぞー！」

『ハガ！追加が来たわ対処して！』

「追加って…おかわりした覚えはねえんですよ畜生!!」

そして武藤か車に飛び乗った直後アリアから敵の増援が来たと通信が入り羽牙は思わず泣きたくなるのだった。

白音 side

———白音！一年の頃衛生科にいたよな？だからバスの中にいる連中の応急手当してやれ！こつちは何とかするから！

白音は自分と入れ違いに武藤が乗り込むのを見届けると先ほどの羽牙の言葉を思い出しながらも負傷した生徒を診ていく。そしてある程度の診察が終わるとアリア達に通信を出すのだった。

「こちら白音！キンジ、アリアさんボクの方はなんとかなりそうだけどそつちはどう？」

『こちらキンジだ屋根上でアンテナらしきモノを見つけたから取り外した！』

『アリアよこつちも爆弾をみつけたわ！位置はバスの下中央に二つ！だけどここからじゃ届かない…って増援!?ハガ！追加が来たわ対処して！』

『追加って…おかわりした覚えはねえんですよ畜生!!キンジ運転手をちゃんと守れよ!』

白音はそれぞれの通信を聞くなか敵の増援が来たことを知り身構える。だがバスの後方から二つ目の爆発音が聞こえると白音はほつと胸を撫で下ろした。

「羽牙のヤツが敵車輛を片付けた今ならこちらも迎撃の準備ができるぞー！」

「負傷した連中は前の方へ移れ！より軽傷なヤツもしくは動ける強襲

科はこつちを手伝え！」

そしてバスがトンネルに差し掛かった頃強襲科であろう生徒達が入ったのだが。

『おい嘘だろ…待て待て待て！神崎聞こえるか！車輻の前へ逃げろ今すぐに！あと白音聞こえてるならそのカツコつけようとしている後ろの馬鹿共を前の方へ引きずり下ろせ！』

『どういうこと！また敵の増援?!』

『——の—弾——輻だ！——マ——ムがきかね——』

「ケイ？どうしたの？ノイズでよく聞こえない！」

突如羽牙から慌ただしい通信が入り白音はバス後方より黒塗りの車輻が急接近するのを確認する。

『クソツタレエ！てめえら全員伏せろオオオオオオ！』

だがその瞬間羽牙の叫び声もむなしくUZIよりも重々しい銃撃音と共にバスの後方が形を変えていったのだった。

Over kill (破)

羽牙 side

「武藤お客だ、俺達でオモテナシするぞ！」

「具体的には!？」

「近づいてブツ放す!これに限る！」

アリア達をバスに降ろした羽牙は入れ替わりに車輛科の武藤を乗り込ませ運転を代わらせる。そしてタイミング悪くアリアの通信が入り二台目の無人車輛が近づいて来ていると知った羽牙はその対処のためオートマグ3を引き抜いた。

「それにしても相手はルノーとかちよつと勿体無い気もするな」

「ルノー?あの車のことしてんのか!？」

「ど、どうしたんだ?そんなに必死になつて」

「こつちにとつちや重要な事なんだよ!何時どこで知つた!？」

「お、おう……偶然人が見ている雑誌に載つててな?読んでるヤツは確か……うおオオ!？」

羽牙は武藤が無人車輛の名前を知っておりその経緯を聞こうとしたのだが後方から迫ってきたルノーからの追撃に対応せざるを得なかった。

「羽牙!悪いがこの話は後だ。いくらこの車に防弾性能を付けたとはいえいつまでも持つ訳じゃねえ!」

「チツ!仕方ねえ!!あとで詳しく教えるよ!」

そう言い羽牙は屋根から身を乗りだしルノーのタイヤやエンジンを狙って発砲しコントロールが利かなくなったルノーは火花を散らしながらクラッシュした。

「あと何台くるんだかまったく……こつちの弾数も気にして欲しいぜ」

「悪人がこつちの都合に合わせて悪事を働いてくれたらそれは悪事じゃなくて出来レースだろうが!」

「そうだな!つともう一匹か次から次へと!」

そう言い羽牙はマガジン内部に残っている弾丸を背後から新たに

接近する車輛に叩き込む。だが先ほどとは違う車種なの大破はせず徐々にその距離を縮めてくるのだった。

「おい、今俺の見間違えじゃなけりやマグナムを弾かなかったか?!」

「その通りだ武藤…!あの車マグナムが効かねえ!」

「防弾でも装甲厚すぎるだろあの車!?このままじゃ追い付かれるぞ!?!」

そして羽牙達はなんとか撃破を試みるも横に並走するまでに近づかれてしまい武藤はその車が助手席以外を装甲で固めたカマロだと判ったが。

「ヨク聞ケテス^{命知らず}ペラードモ。オ前達ハコチラノ計画ヲコトゴトク潰シヤガリマシタノデ。報復ヲ受ケヤガレデス」

「はあ?計画だ!?!テメエの都合なんぞ知るか武偵殺し!此方だつてテメエに恨みがあるんだ!それを考えたらお前の報復なんぞ赤子のヒステリー並みに下らねえんだよ!」

カマロは羽牙達の車を追い抜こうとはせず突如括り付けられているメガホンから武偵殺し特有の機械音声^が聞こえ羽牙達に報復を行うと宣言したのだが。

「この車はお前らのおかげで用意できたお前らの為の車だ。だから教えてやるよ私に刃向かうとどうなるかって」

「どういう意味だ?つておい嘘だろ…待て待て待て!神崎聞こえるか!車輛の前へ逃げろ今すぐに!あと白音聞こえてるならそのカツコつけようとしている後ろの馬鹿共を前の方へ引きずり下ろせ!」

『どういうこと!また敵の増援!?!』

「助手席に軽機関銃^を乗つけた防弾車輛だ!マグナムがきかねえからとりあえず前の方へ逃げろ!」

『ケイ?どう——の?ノイズで——聞こーない!』

「テメエら全員伏せろオオオオオオ!」

先ほどまでの片言とは違い同じ機械音声で自分に刃向かえばどうなるかと言いかマロはスピードを上げていく。

そして羽牙は一瞬窓の隙間から見えた助手席の銃を見るや慌てて神崎達に連絡を送るがノイズが走り伝わらずカマロに搭載された軽

機関銃から弾丸が吐き出される中羽牙は叫ぶしかなかった。

白音 side

「痛ッ……み、みんな大丈夫!?!」

「なんとかね……白音君の指示がなければ危ない所だったよ」

軽機関銃による銃撃が終わり白音が体を起こし車内の状況を確認する。まず白音の無線の音を拾っていた不知火は車輛後方にいた強襲科の生徒を前方へ引きずり込もうとして右腕を負傷、その他の生徒も少なからず傷を負ったのだが唯一幸いだったのは機関銃の狙いが車輛上部だったため空の見通しが良くなった程度と言うことだった。

「良かった……ってそうだ!アリアさん!キンジ!そっちは大丈夫!?!応答して!」

『白音!キンジ!誰でもいい状況を教えろ!みんな無事なのか!?!』

「ケイ!こっちはなんとか大丈夫!だけど屋根に登っていた二人からまだ返事がないんだ!」

『こちらキンジ!アリアが負傷した!血を流して意識がない!だから今車内に連れてくから応急処置を頼む!』

「ダメだよ!動かさないで!今からボクが向かうから出血箇所をハンカチとかで圧迫しといて!」

『危険だ白音!まだヤツは全弾撃ち尽くしたとは思えないリスクが高すぎる!』

『ならその点は心配するなキンジ:俺も久々にキレちまったもう容赦はしねえ徹底的にブチのめしてやる』

そしてトンネルを抜けキンジからアリアが負傷したと通信が入り白音はそちらへ向かうと返事をかえす。だがキンジはまだ装甲車が残っており危険だと思えばまさに八方塞がりの状況のように思えたのだが羽牙からの通信が入りその声は確かな怒りを含んでいた。

羽牙 side

「心配するなキンジ：徹底的にブチのめしてやる…！」

トンネルを抜け羽牙はバスの惨状を確認するとギリツと歯を食いしばり武偵殺しへの確かな怒りを発する。そして羽牙は後部座席のシートをめくりあげその中に入っているパーツを組み上げ始めた。

「羽牙！ブチのめすってどうするんだ!?こっちの武器じゃ火力が足りないしそもそも爆弾が！」

「火力ならある。あと爆弾はあの二人が何とかするさ…」

そうして羽牙はレインボーブリッジに差し掛かったとき外を見ると一機のヘリコプターが飛んでいるのが見えそこにレキと尋耶が乗っているのを確認すると先ほどから組み立っていたモノが完成し準備が整ったのか尋耶に通信を送った。

「聞こえるか尋耶！標的はバスの下、中央付近に二つ、性能は先日キンジが仕掛けられた物と同種。仮称としてノンストップと名付けるがそれらが軽くバス一台を吹き飛ばせる量が仕掛けられてる！更に神崎が負傷したらしく時間もねえ！だから合図を送ったら直ぐに撃ち落とせ！」

『さてよテメエ！合図ってまさかアレ使う気か!?マグナムはどうした！』

「弾かれたからコイツを使うんだよ！そうじゃねえとあの装甲は抜けねえ！」

『わかったよクソツタレ！準備しとくから何時でも行け！』

「おう！、さあて武偵殺しィ：今度のは只の弾じゃねえぞ！」

そうして通信を終え羽牙は組み立てたデカブツを構え重々しいコッキンググレバーを引くと防弾カマロに照準を合わせ引き金を引くのだった。

「わかったよ！クソツタレ！準備しとくから何時でも行け！」

『おう！』

「というわけだレキ！羽牙の開幕射撃に合わせ3秒後にバスの爆弾を狙撃する！」

「わかりました。では右の爆弾は任せてください」

そうして尋耶は膝撃ちの姿勢になり羽牙の部屋から取ってきたP S G―1を、レキはヘリの床に伏せた状態で愛銃のドラグノフを構え二人はそれぞれスコープを覗き込んだ。

???
side

「この車はお前らのおかげで用意できたお前らの為の車だ。だから教えてやるよ私に刃向かうとどうなるかって」

ここは武偵殺しである彼女が利用しているホテルの一室であり彼女が眺めているパソコンのモニターには先ほど猛威を振るったカメラから送られてくる映像が映っていた。

「くふふ♪これであの命知らずどもに報復もできるしオルメスも倒せて一石二鳥だざまあみろ！アハハハハハ！……は？」

だが突如としてカメラの車体が大きく揺れたあと車は減速し3秒後バスの下に取り付けた爆弾が海へと落ちていくのが見え彼女はそっけない声を上げた。

「なんで!?どういうことだよ、あの防弾車輻は二十ミリの鉄板を使った特注品だぞ!？」

『お、キレーに抜けてるなくさすがだぜホント!』

『逆にそれを使って抜けない車があったらもはや防弾じゃなくて装甲車だよ』

そして映像には防弾車輻が停止しヘリから降りてきた尋耶と合流した羽牙映っており彼女に言いたいことがあるのかカメラに向かって話しかけた。

「今度のは只の弾じゃねえぞ！」

そう言い羽牙は後部座席に分解して隠しておいた物を組み直しカマロに狙いをつける。

それはシモノフPTRS1941という対戦車セミオートマチックライフルであり、バイポッドをファイアットの屋根に置き固定した後躊躇なく引き金を引き背後からカマロのエンジン部分を撃ち抜く。

その3秒後二発の銃声がなり海面から二本の水柱が上がったのだった。

「うおお!?今度はなんだ!?って羽牙そのバカデカイライフルはどこから出した!まさか後部座席に収納スペースを作ってくれてそういうことか!?!」

「わりい武藤、ホントは遊び半分に入れてみたんだが実際使うとは思わなくてな?それよりも相手の様子を見に行くから止めてくれ」

そうして羽牙はライフルを方に背負うと車を降り接近してきたへの風を浴びながらも停止したカマロに歩いていくのだった。

Over kill (急)

???
side

彼女の失敗を一言で言えばリサーチ不足といえよう。なぜなら彼女は彼らが邪魔することを視野にいれ念入りに準備したからだ。

まずキンジの時計をずらしバスに乗り遅れさせ、バスなかの連中が動けないように二台の無人ルノーを配置する。更に対奴ら用のLM G付きの防弾カマロまで用意した。だがそれでも彼らが一枚上手だったのは変わらず彼女はモニターの前で悔しがった。

「お前らはソ連の残党か何かなのか!?なんで武偵が対戦車ライフルなんて持つてるんだよ!しかもあんな旧式の銃なんて一体何処から仕入れた!」

完璧だった、コイツらが来ることすら予想した計画だったのだがそれでも敵わなかった事にうがー!と彼女はヒステリーを起こした。そして未だに切れていないパソコンのモニターから声がしそちらに視線を向けると今はみたくもない映像がうつり顔をしかめた。

『よう、武偵殺し聞こえてるか?多分聞こえてるよな?おーい!……あら?おい尋耶ホントにこれ音声拾うタイプだよな?あちらさん無反応なんだけど……』

『間違いないと思うぞ?確かそれ最近広告で見た最新機種だし』

『ホントかよ?そうじゃねえとめっさ恥ずかしいことしてるんだからな?信じるぞ?コホン、アーアー、ではでは武偵殺しさんお待ちせしました!結果報告のお時間です』

そんなふざけた雰囲気で羽牙はカメラに向かって話始め尋耶もニコニコしながらその様子をみていた。

『さて!あなたが何処まで計画していたかは知りませんが見事あなたの計画を阻止させていただきました!』

『そして残念ながら神崎さんが負傷してしまいこちらは大変になりましたが神崎さんの命に別状はないみたいです!』

だが次第に羽牙の額には青筋が浮かび上がっていき。

『だからこそテメエさんの作戦は半ばで失敗したざまあ見やがれと称賛を送ってやります。あと…』

『よくもやってくれたな!? こちとら色々とテメエに振り回されたりクライアントを傷付けたりと大損なんだよ! だから次会うときはブタ箱中に入っているテメエと檻の前でご対面だ覚悟しとけ武偵殺し!』
最後には態度をぐるりとかえ羽牙は中指を立てながら搭載されているカメラに向かって怒号をあげせ仕上げとばかりに蹴り抜こうとしたときに映像がプツリと切れる。

その理由は画面には数センチほどの穴が3つ空いており肩で息をし怒りで顔を赤くしながら彼女は画面に向かって銃を発砲したからだった。

「上等だよ…! オルメス共々お前らも葬ってやる!」

三人称 side

「オラツ! つと、挑発としてはこんなもんか?」

「上々だろ? これほど煽られて正気でいられるほど向こうも余裕ないと思うしな」

「そりやまたなんで?」

「ああ、それはな…つてちよつと待てなんかさつきから嫌な音が聞こえるんだが?」

「そうか、奇遇だな尋耶俺もだ」

尋耶が相手が余裕が無くなってきてる理由を説明しようとしたときふと防弾車輻から一定の間隔でなる電子音に気づき話を中断する。だがこんな電子音を流すモノなど1つしか二人には心当たりがなく。「逃げるつきやねえ!」

大急ぎでへりの方へと走り出しその数十秒後防弾車輻は大爆発を起こしたのだった。

アリア side

所変わってここは学園島にある武偵病院そこには昼間武偵殺しによるバスジャックを阻止しようとし負傷してしまったアリアがおり、被弾した額の傷を鏡で見ながらも先ほどの事を思い出していた。

「ごめんなさい…アタシがもう少し早く屋根に登っていたら」

「気にするな、それに何かあったときの保険の為に羽牙たちを呼んだんだろ？ だったらそれでいいじゃないか」

「それでも…アタシのせいで…爆弾の処理をジンヤ達に任せてしまったのは事実よ…」

そんな会話をし二人の間に沈黙が流れる。そしてキンジはアリアの額に巻かれている包帯に気づき先ほど医者から聞いた事を思い出してしまった。

「そう言えばその…傷の方は大丈夫なのか？ 額の傷は残るかもしれないって先生が言ってたが…」

「大丈夫よ…医者が大袈裟すぎるだけ。それよりも武偵殺しに通じる情報は何かあったの？」

「あ、ああ。羽牙達の話じゃ車輛は全て爆発してたらしくて恐らく武偵殺しが証拠を残さない為に仕込んだ爆弾じゃないかっていったな」

「やっぱり…他に報告することは？ ないならもういいわ出て行って」
「出て行ってどういうことだよ」

だがアリアのどこか素っ気ない態度を不満に思ったのかキンジも言葉使いが強くなり次第に二人の言葉にトゲが生え始める。

「本気を出さなかつたくせに…」

「はっ…本気？」

そしてアリアがこぼした一言にキンジは理解出来なかったのか

そっけない声をあげてしまうのだった。

「そうよ本気よ！気づいてないでも思ったの!？アンタは今回の任務のとき絶対に本気を出してなんかいない!？どうして!？なんでアンタはあの時の実力を出さなかったのよ！」

「仕方ないだろ！それにあの時の俺はCランクのたまたま運が良かったただの武偵だったんだよ！」

「運なんかじゃないわ！実力よ！アタシの勘がそう言ってるんだから違うわ！」

「勘つて…！もういい！そんな当てずっぽうな根拠のためにこつちを振り回さないでくれ！」

そう言うときンジは乱暴に扉をあけ病室を飛び出していく。

「悪かったわね…当てずっぽうで…そうよアンタはアタシの探している人じゃなかったのよ…」

そして誰もいなくなった病室でアリアはポツリと呟いた。

三人称 side

——どうしてアンタはあの時の実力をださなかったのよ!？

先ほどのアリアからの言葉が耳に残る中、病室を飛び出したキンジは廊下の曲がり角を過ぎようとしたときに人とぶつかりしりもちをついてしまう。

「痛ツテエ…」

「おろ？ぶつかってすまねえ大丈夫か？つてキンジかよ。どうしたそんな急いで」

「なんだよ羽牙と尋耶か…どうしたんだ？お前らは怪我とかしてないだろ？」

「病院には怪我人しか来ちゃいけないってルールはねえだろ？というかクライアント神崎の見舞だよ」

ぶつかってしまったキンジに対し羽牙は「大丈夫か？」と手を差し伸べ尋耶は見舞いに来た理由として「ほれ」と言いながら紙袋を見せ

つけた。

羽牙 side

「なるほどね…それで病室を飛び出してきたと。そうだなキンジたまには嫌なことは忘れてお喋りでもするか！と言うわけですまねえ尋耶！神崎の見舞い頼んだ！」

「へいへい、ごゆっくり」

そう言う羽牙は尋耶に神崎の見舞いを任せキンジを連れ屋上へと連れていく。そして備え付けの自販機から適当な飲み物を買ってキンジ渡すと羽牙は口を開いた。

「それで、神崎と口喧嘩してどう思った？」

「どう思ったって…何をだよ？」

「お前のことだヒスなんたらのこと話してないんだろ？それで実力を疑われた。アタリか？」

「うぐ…なんでそう的確に当ててくるだよ？まさか見てたのか？」

「そんなわけねえだろ？それに俺らは探偵なんだぜ？推理してなんぼだろ？」

そう言う羽牙はキンジと会話を続けるのだった。

尋耶 side

「失礼しますよっと」

羽牙と別れた尋耶はアリアの病室を見つけたのか軽くノックし部屋へと入る。するとアリアは泣いていたのか少し目を赤くしながらも尋耶に向き直った。

「よお、神崎調子はどうか？って聞くのは野暮か…」

「ふん、余計なお世話よ！それよりなんの用？」

「なあに、ただの見舞いだよ。ほれ松本屋のももまん好物なんだろ？」

ポンと尋耶は紙袋からアリアの分のももまんを渡すと自分の分を食べながら話始めた。

「まあ、なんだ？キンジになにかを求めているのはわかるがそこまで切羽詰まってんのか？」

「ふん、知ってるくせに…アンタのことだからどうせ裏の裏まで調べたんじゃないの?」

「さあな? 神崎はどう思ってた?」

「当然黒よ! アンタはハガと違って抜かりがない。いいえ、むしろ仲間の為なら味方だつて疑つて利用するタイプだわ」

そうしてももまんを食べ終わりつつもアリアは自分の考えを尋耶にぶつける。だがその答えを聞いた尋耶は自分の食べている分を全て飲み込むと口の端をつり上げた。

「味方すら疑つて利用するタイプね…クククツ! よくわかつてんじやねえか神崎・ホームズ・アリア。流石は名探偵の子孫ってか? そうさ俺はそういう男だ! 確かに俺が興味のない人間なんざ名前も気にならねえただの有象無象だと思つている。だがな…!」

「っ!」
尋耶はアリアへ向かい自らのソレを見せつけアリアは息を飲む。それでも尋耶は構わず捲し立てる。

「てめえが消えねえ額の傷を気にしている間にも俺みたいな奴らは生きようと必死に地べたを這いずり回つてんだ! 時間がない? ああそうだろうな! 日本の法律つてのは厄介だお前の母親に猶予がないのも判る! だがな、なぜそこまで悪化するまで放置した? 何故だれにも頼るということをしなかった? 答えてくれよ神崎アリア」

羽牙 side

「ハハハッ! まあ、そんなこともあるさ。それにネタバレするとさっきの推理だつて尋耶にヒントをもらえたころ出来たことなんだぜ?」
何気ない会話をしながらも先ほどの事を話したキンジは羽牙の言葉を聞いて目を見開く。そしてキンジはふと思ったことを羽牙に聞いた。

「なあ…羽牙はどうしてそこまで頑張れるんだ? 武偵なんて例え活躍してもそうじゃなくても後ろ指差されるものなのに…」

そして羽牙は「ふむ…」と考え込んだがなにかを思い付いたのか二

カツと笑いながら語る。

「そうだな〜？とりあえずはキンジが俺の事を勘違いしてるってことをまず訂正しないとイケないな」

「勘違い？」

「ああ、俺は別に頑張っちゃいけない競ってるだけさアイツとな」

「アイツって尋耶のことか？」

羽牙は「その通り」と言いながら飲んでいたエナジードリンクを飲み干すと空き缶をゴミ箱に放り投げる。すると空き缶は弧を描きながら大口をあけたゴミ箱に見事に入りそれを見た羽牙は満足げに言った。

「Bullseye！つと。そうだぜ？『切磋琢磨』意味は知ってる？」

「互いに高め合い努力するだったか？」

「そんなとこだ。前にも話したと思うが俺らには姉がいてな？まあ、すげえ人たちの訳よ！おまけに家も御隣さん同士だからすんげえコンビネーションもバツチリでさ！俺らが通ってた武偵校じゃwild sistersなんて二つ名持つててまるで高嶺の花だ！」

その時ふとキンジが見たのは自分の姉を自慢げに話し目を輝かせる羽牙だった。

「んで！その人たちに追い付くには？と考えた結果いわば競争の形になったわけだ」

「競争？」

「おう！どつちが自分の姉を先に追い越すかってな！」

だが羽牙は「まあ、そううまくはいかないけどな…」と苦笑いしながら自分の頬を搔く。しかしキンジはそれがとあるキツカケで話してもらった過去の事だということがわかった。

「あの…事か？でも仕方なかったんだろ？」

「そうなんだけどなキンジ。いいか？失敗に仕方なかったってことはないんだよ、だから一度失敗した俺らは『次失敗しないように努力しなきゃいけないんだ』」

「次に失敗しないように努力？」

「そうだけ？それに人生に失敗なんて幾つもある。だから絶対失敗しないなんてことはないんだ」

「絶対に失敗しないことなんてないか…」

その言葉を聞きキンジは胸に手を当て深呼吸する。ソレを見た羽牙は満足げに笑い屋上をあとにしようとすしかし入り口に向かう途中ピタリと歩みを止め最後にこう言った。

「その様子だとなんか理解したっぽいな？ならあとは自分で考えて行動しろよー！」